

『現代中国の子育てと教育： 発達心理学から見た課題と未来展望』

矢藤優子*・吉沅洪**・孫怡***編、ナカニシヤ出版、2023 年

毛 新 華†

本書は、編者のほか新鋭となる7名の若手研究者が加わり、錚々たるメンバーにより執筆された中国の子どもたちの保育・教育・発達を明らかにした紹介書である。日本と中国に在住している10名の執筆者はいずれも中国というフィールドにおいて子ども保育・教育諸領域で活躍している研究者・専門家たちである。

本の「あとがき」で本書の出版の経緯は以下のように紹介されている。

編者の3氏が所属する立命館大学では2015年12月、アジア研究を行う国内外の研究機関をつなぐ結節点となるような研究機構として「立命館アジア・日本研究機構」が設置された。この機構において、研究高度化推進施策として実施されている「アジア・日本研究推進プログラム」の中で、2021年度より、本書の編者の一人でもある矢藤優子氏が研究代表者となる「東アジア圏の家族観のもとでの科学的根拠に基づく育児・就労支援の構築」プロジェクトが採択された。本書の3名の編者は本プロジェクトの主要メンバーであり、執筆者の全員が何らかの形でプロジェクトの研究活動に寄与している。

本書は4部10章から構成されている。第1部の「中国における幼児教育」は2章から構成されている。第1章は中国の託育サービスの現状と課題に関する内容である。「託育」は中国で実施されている3歳以下の乳幼児に対するケアと教育と定義され、中国の「託育元年」である2019年より、国全体でサービスを構築し始めているという。本章では、まず、「託育元年」に辿り着くまでの70年間の歴史を紹介している。その上で、浙江省という地域を中心に、統計データを用いて、託育サービスの利用現状を示した。その後、託育サービスの国レベルの方針、そして、浙江省の子育て支援システムの仕組みをきめ細かく紹介しながら、サービスを利用する保護者側の視点、サービス供給側の視点、さらに、託育人材育成の視点から、その課題を検討している。

第2章は中国の就学前教育に関する内容である。この章では、前の章に焦点を当てた3歳以下の乳幼児から小学校入学前の子どもまで年齢範囲を拡大して、ここ10年間の中国の就学前教育事業に

* 立命館大学総合心理学部教授

** 立命館大学大学院人間科学研究科教授

*** 立命館大学立命館アジア・日本研究機構准教授

† 神戸学院大学心理学部教授

mao@psy.kobegakuin.ac.jp

について紹介した。章の始めに、2010年以降の就学前教育について、国の政策・制度の整備、資金源の確保、教育資源の拡充、そして教育の質の向上、さらに教員養成と質の向上という観点から、多くの国および地方自治体の政策や統計データを引用しながら紹介している。その上で、このような教育サービスを利用できる枠が少ないという「入園難」の問題、そして、利用料金が低いという「入園費高騰」の問題の対応として、多くの国民が利用しやすい「普惠型（コミュニティ型）」幼稚園が紹介され、あわせて、託育所と幼稚園が合体した「託幼一体化」という中国の新たな模索も示した。この章は国際比較を通して示された中国の就学前教育の国際順位、そして中国の研究者らが提示した課題点で締めくくられている。

第2部の「中国都市部の家庭養育」は3章から構成されている。第3章では中国の都市部における祖父母の育児参加の現状が検討された。現代の中国の育児事情の特徴の一つとして、祖父母の育児参加率が高いことが挙げられる。それは中国伝統的な家族観や現代中国の一人っ子政策および激しい社会競争の影響によるものである。この祖父母育児参加の現状を、参加率、参加内容の多様性、そして、参加の原因、さらに参加のメリット・デメリットの側面から概観した上、二つの研究を通して中国・上海の実態を明らかにしている。そのうち、0～3歳児家庭を対象とした調査を通して、祖父母が子どもとのコミュニケーションを重視するとともに、子どもの習慣養成や栄養飲食を懸念していることが示された。一方、3～6歳児家庭を対象とした調査によって、祖父母が子どもの生活習慣指導に最も力を入れていることが明らかとなった。また、この章では、統計的な手法（仲介効果検定）によって、祖父母の育児参加が母親の育児自己効力感の向上に直接影響を与えるだけでなく、母親の育児ストレスの低減を通して間接的にも影響を与えることを明らかにした。最後に、これらの結果を踏まえて、育児に参加している祖父母への支援も提言されている。

第4章は、祖父母による育児が子どもの発達に与える影響に関する内容である。章の始めに、中国都市部における祖父母との共同育児の社会背景が、先行研究を引用しながら丁寧に述べられた。そして、祖父母共同育児の現状および子どもへの影響を、自ら実施した中国上海での3つの大規模実態調査（1歳児家庭、2～3歳児の家庭および3～6歳児の家庭）の結果を通して明らかにした。これらの調査によって、子どもの生活面や教育面での主な担い手（親世代か祖父母世代か）、世代間の育児理念の相違を明らかにした。また、これらの調査データに基づき、祖父母との共同育児が子どものパーソナリティの発達（気質・性格や親子の愛着、社会適応）に与える影響を検証した。その結果、祖父母の育児参加度が高いほど、親子間の愛着関係は不安定になりがちで、子ども自身の社交性が低くなり、反応の激しさが高くなること、また、養育スタイルが反応の激しさおよび愛着を介して社会適応にも影響していることが明らかとなった。一方で、祖父母の育児への参加時間の多さより子どもへのかかわりの質が愛着関係を左右し、そして、世代間の育児理念の一致度は子どもの複数の養育者との間の良好な愛着関係の構築や、子どもの外在的な問題の少なさに貢献していることも明らかとなった。

第5章は、大学生を対象としたインタビュー調査の結果から考える中国の家庭文化に関する内容である。質的研究のメリットを活かして、内省（インタビュー）を通して、大学生から見た親の養育のあり方や、親の養育の背景にある中国の家庭文化を検討した。6名の中国人大学生から、親の養育態度の良し悪しやそれに影響された自分の成長などをインタビューの質問項目とし、きめ細かく自身と親とのかかわりの様相を引き出すことができた。これらの内容に基づき、家庭文化の視点から見られる親の養育のあり方、手を出す養育のあり方と家庭文化との関係、そして、親の養育態

度が自分自身の成長へいかに影響するか、さらに、その影響を受けて、将来自分が親となる時の展望について考察されている。

第3部の「中国農村部の留守児童・流動児童」は3章から構成されている。ここから、視点が中国の都市部から農村部に移され、両親の出稼ぎによって農村に残されて親と離ればなれに暮らす「留守児童」、そして出稼ぎの両親に帯同され都市部に移動して暮らす「流動児童」に焦点が当てられた。その最初の第6章は、留守児童・流動児童の動的家族画（描画者が描いた自身の家族が何らかの行為もしくは動作を行っているところの絵）に関する内容である。この章の最初では、心理学、社会学、人口学などの視点による留守児童を対象とした先行研究を通して、彼らを取り巻く社会環境や心理的特徴をはじめとした諸側面を詳細に紹介している。その後、中国大陸において動的家族画に関する研究がほぼない中、中国安徽省にいる留守児童・元留守児童225名を対象にこのような心理臨床的技法を実施した。得られたデータに対して量的な分析を施して、細部に至るまで留守児童の特徴を明らかにした。また、事例紹介を行い、留守児童問題の解決に提言を行っている。

続く第7章では、中国の戸籍制度によって行政サービスや教育サービスから取り残されている流動児童問題発生仕組みについて、そして、その問題を対処する試みとして18年間にわたる「非正規」就学前教育組織である「四環遊戯グループ」の取り組みが紹介されている。その中では、流動児童の親子を取り巻く環境、グループの名前の由来や設立の経緯、そして、子どもおよびその親への具体的な取り組み、さらに、得られた成果を写真とともに細かく示している。四環遊戯グループの非正規就学前教育モデルは子どもの発達だけではなく、中国の情勢に沿った親への育児支援にも大きな役割を果たしており、中国における流動児童の教育問題解決の急先鋒とも言える。

さらに、第8章は農村部の留守児童の社会情緒発達についての内容である。この章では、まず農村部留守児童を取り巻く生活環境のリスク、とりわけ経済的貧困、養育者の教育水準の低さ、子どもの愛着の崩壊について先行研究をレビューした。その上で、中国の河南省農村部で実施された留守児童を対象とした家庭訪問調査の結果が紹介された。留守児童が非留守児童より情緒的不安を抱えている状況を、家庭環境や母子分離をはじめとする、さまざまな角度から解明した。また、農村部における育児過程で起きる体罰の問題にも焦点を当てた。これらの議論を踏まえて、養育方法、そして、親子のかかわりの二つの視点から、農村部の育児家庭への提言がされている。

2章から構成されている第4部「中国の障がい児・者およびその保護者」では、要支援児童に視点が移された。最初の第9章は、自閉症児を持つ母親・父親の現状についての内容である。章の始めに、中国の地域による「自閉症」の呼称の違い、そして中国における自閉症児の人口、自閉症児を持つ親の援助ニーズおよび政府や社会による支援と介入のシステムに関するレビューとつづく。その後、中国上海において、自閉症児を持つ母親・父親のそれぞれに対して、動的家族描画法を用いて、母親ないし父親のそれぞれにおける役割および性別特性からの支援のあり方を検討している。

第10章は中国の養護学校に関する内容である。この章は、「政策編」、「現場編」と「実践編」の三つのパートによって構成されている。「政策編」では、障がい児を取り巻く中国の政策・法律の整備、障がい児の入学率、学校数、就学方式、教員の専門性およびカリキュラムの構成について紹介している。また、「現場編」では、江蘇省蘇州市に焦点を当て、市史や統計年鑑から市の障がい児教育の歴史や最近までの教育体制をレビューした。その上で、義務教育、高等学校教育（職業訓練）を受ける障がい児童や少年に向けての教育を無償で提供している「仁愛学校」の10年間の歩みを紹介した。最後に、「実践編」では、「仁愛学校」で行われた発達検査の取り組みとともに、入学した障

がい児の入学後の変化が事例紹介の形で示されている。

以上の内容の紹介からわかるように、本書は現代の中国の子育てと教育について実に幅広く言及している。その範囲は、乳幼児から就学前の児童まで、都市部から農村部まで、中国の政策・法律というマクロな視点から個々の教育施設および家庭というミクロな視点までである。また、研究方法も多様で、基礎研究の視点から臨床研究の見地まで、質的分析から量的分析までである。大げさな言い方になるかもしれないが、現代中国の子育てと教育を360度隙間なく検討していると言えよう。また、どの章にも中国のことわざを多く引用しているため、現代の心理学理論を援用しながらも中国文化に根ざした分析を行ったと言える。しかも、それぞれの章において、問題解決に対する適切な提言もなされた。これらの点から、本書を一読すれば、現代中国の子育てと教育を全方位からの理解が期待されると言えよう。

また、評者は本書に挙げられている事例や分析の結果を読み、評者自身のこれまでの経験と照らし合わせながら、ひたすらうなずいてきた。というのも、評者は中国の初代の一人っ子世代であり、両親の仕事の多忙さや中国東北部の冬の極寒が原因で、居住条件が良く自由時間を多く持っている定年退職した祖父母のところで養育されてきた。しかも、その養育形態は時間を超えて次世代にも伝わることになった。評者は、日本での留学・仕事の多忙さにより、自身の二人の子どもを中国にいる両親、つまり子どもの祖父母に託しており、評者の子どももその幼少期を祖父母と過ごした。いろんな意味で本書の内容は自分自身の子どもとしての体験、そして親としての体験と多く重なった。そして、評者自身が修士論文で、中国の高校生を対象に親の養育態度が子どもの社会化に与える影響について検討したこともあり、本書の低年齢層の子どもを対象とした研究の結果と合わせて読むと、中国の子育てに対しての理解を深化することができた。これらの評者の個人的なことと合わせると、今回の書評を書く機会をいただくことも一種のご縁かと感じた。本書の編者そして執筆者の諸氏に感謝したい。